

# たどり着いた初優勝

## 周り気にせずプレーに集中

《15～17歳男子優勝》

8アンダー、136

長野 泰雅（福岡・沖学園高3年）



ようやくというか、やっとというか、九州ゴルフ連盟（GUK）主催のタイトルに手が届いた。中学2、3年時には九州中学校ゴルフ連盟大会を連覇。その実力は誰もが認めるころだったが、GUKの大会には不思議と縁がなかった。

「九州なら勝てる、と思い、逆に力が入って。僕はメンタル面が弱い。周りのことを気にしすぎてプレーがおろそかになる」と自らの弱点を理解しながらも、打開できないままだった。

だが、今回は違った。首位の山下に1打差の2位でインからスタートし、3番でボギー。「最終組のメンバーの中で最初のボギーだった。周りやスコアのことを気にしすぎていた」と自分の悪い部分に気づく。ボギーが長野を目覚めさせたのかもしれない。プレーに集中すれば結果もついてくる。その後の4つのロング全てでバーディーを奪った。終わってみれば、ただ一人、2日間60台で回り、2位に3打差をつけた。

今年の九州アマでは悔しい思いをする。初日81を叩いたものの、2日目の71で予選を通過。3日目76、最終日74で結局4打届かずに日本アマには出場できない。「悔しくて、

ずっと練習していました。練習しかないと思い」。辛さがバネとなり、今回の優勝につながったと考えれば、長野には価値のある試合ではあった。

九州チャンピオンとして臨む日本ジュニア。「全国はいい。自分よりうまい人が多いし、気が楽です」。長野は九州王者と言っても、肩ひじを張らずに自然体で向かう。

# 九州女子アマと2冠

## 自身初の1試合2イーグル

《15～17歳女子優勝》

9アンダー、135

櫻井 心那（長崎日大高3年）



10年ぶりの快挙だ。同一年に九州女子選手権と九州ジュニアを制したのは2011年の城間絵梨以来となる。「2冠はすごいと思います。ジュニアでは勝ってなかったし、九州は1、2年生も強い選手が多い。優勝は自信になります」と櫻井は素直に喜びを表現した。そして「どっちがうれしい？ 女子アマですかね」とひと呼吸置いて答えた。

優勝争いは櫻井の言う「強い1、2年生」が相手となった。最終日最終組。トップは初日64の1年生荒木、2打差、66の櫻井を間に挟んで、3位が68の2年生外園。櫻井は1番でピン左4mのバーディーパットを決めて幸先のいいスタートを切った。しかし、3番シ

優勝争いは櫻井の言う「強い1、2年生」が相手となった。最終日最終組。トップは初日64の1年生荒木、2打差、66の櫻井を間に挟んで、3位が68の2年生外園。櫻井は1番でピン左4mのバーディーパットを決めて幸先のいいスタートを切った。しかし、3番シ

ョート（167ヤード）のバンカーにつかまり、2打で脱出してのダブルボギー。痛いミスではあったが、続く4番ロング（489ヤード）でピンまで残り213ヤードを5Wでカップ右に2オン。これを沈めて一気に取り返した。14番ロング（523ヤード）でも2オンに成功してイーグル。人生初の1試合2イーグルを達成した。結果的にはダボの直後のイーグルが優勝への導火線となった。

九州女王で挑んだ6月の日本女子アマは14位タイ。今度は九州ジュニア女王として臨む。「全国の試合で優勝争いをしたいし、最終日最終組で回りたい。3日間とも60台をそろえたい」。自信に溢れたセリフが口をついた。

## 中3の飛ばし屋

### 6番ミドルでは350ヤード

《12～14歳男子優勝》

3アンダー、141

丸尾 怜央（宮崎・赤江中3年）



耳を疑いたくなるような数字だった。平均飛距離を聞くと、丸尾はあっさりと「330ヤードです」と答えた。さらに、「6番は飛びましたよ。ピンまで残り70ヤードでした」。6番ミドルは436ヤード。打ち下ろしはなく、どちらかと言えばフラットに近い。つまり、350ヤードのロングドライブを記録したのである。これまでの最長飛距離はジェイズCC日南コース（宮崎）で、フォローの風が吹いていたが、400ヤードのミドルをグリーンオーバーしたという。

この飛距離を武器に初日69で首位に立つと、最終日はパープレー。通算3アンダー、141で2位に4打差をつけて優勝した。「優勝はうれしい。アイアンは良かったけど、パターが。勝負どころで決められなかった」と静かな表情を浮かべた。

ゴルフを本格的に始めたのは小4からだだが、それまではサッカー、水泳、新体操などのスポーツをこなした。強い体の基礎がこの頃に培われた。167cm、65kgのガッチリとした体格。2年前の11月、地元宮崎で開かれたプロのトーナメント、ダンロップフェニックスで憧れの飛ばし屋C・チャンプのスイングを頭に焼き付け、コーチの指導やYouTubeの動画を参考にしてスイングを改良した。それから「暴れていた」ティーショットが安定するようになり、比例するようにスコアもまとまってきた。

「今はショットが安定しているので自信もあります。初めてで緊張すると思うけど、自分のプレーをしたい」。初出場となる日本ジュニアで丸尾の豪打がさく裂する。

## 「取りたかった」

### インの3連続バーディーで決める

《12～14歳女子優勝》

3アンダー、141

藤本 愛菜（福岡・沖学園中3年）



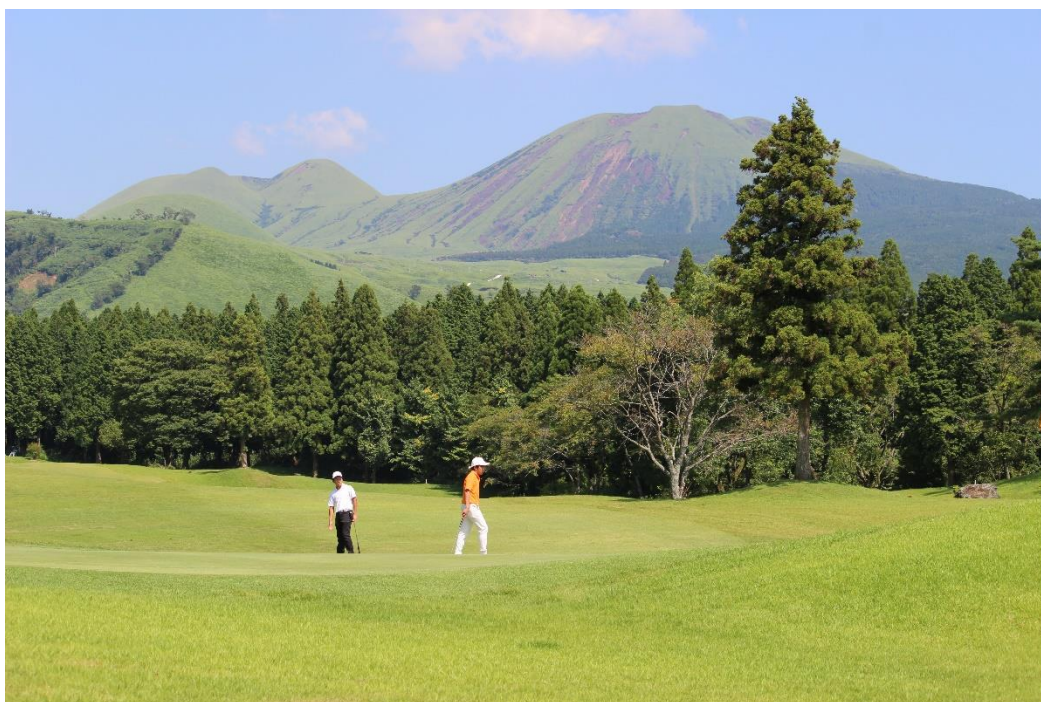
実感が溢れた。「今年は1個も（優勝が）取れてなくて。取りたくて。やっと優勝しました」。そう言って藤本は大事そうに両手で優勝カップを抱えた。

初日69でトップに立ったものの、3打差以内に4人と余裕の持てる位置ではなかった。おまけに前半のアウトは藤本が

苦手とする9ホール。「合わないといいますが、構えにくい」。これは生理的なものだからどうしようもない。それがプレーに表れる。2番で50cmのパーパットを外して3パットのボギー。「あれで焦ってしまって」と5、7番でも3パットのボギーで崩れる。いずれもファーストパットをショートした。負の連鎖である。その後、9番ロングのバーディーで息を

吹き返して、14番から50cm、5m、5mと3連続のバーディーパットを沈めて初の栄冠を手に入れた。

ドライバーの平均飛距離は240ヤード。アプローチが得意だが、課題は最終日のアウトでも顔をのぞかせたロングパット。「3日間、アンダーで回りたい」。初の日本ジュニアでの目標を現実にするためにも課題の克服がポイントとなる。



コースから見える雄大な阿蘇の山並み